



中学生の部

内閣府特命担当大臣(こども政策担当)賞



「僕の友達」

北杜市立甲陵中学校
1年 永井 匠さん

僕にはK君という友達がいる。小学校に入学してから六年間ずっと同じクラスだったかけがえのない存在だ。K君は普段僕達と同じクラスで授業を受けているが、特定の授業になると支援クラスのいちご学級に行くこと、いつも担任の先生以外に一人先生が付いていることくらいがK君が少しだけ特別だったことだ。K君には少しこだわりが強いところがあったり、周りと違うことをすることもあったりしたけれど、それでK君に怒ったり仲間外れにしたりするようなクラスメイトは居なかった。K君がチームや班に居ればどうすればK君がやりやすいか考え

な?と思った。僕は今回班長をやっているし、せつかくならと「K君、部屋長やってみない?」と聞いてみた。K君は驚いたようだった。まずかったかなと思い、僕は少し早口になりながら「僕達もいるし大丈夫だよ。もし嫌じゃなかったらどうか」とK君に伝えた。K君は少し考えると「うん、やってみよう」と笑顔で答えてくれた。ほっとして僕は担任の先生に、僕ら二人が同じ部屋になったこと、K君が部屋長になったことを伝えるに行った。先生も驚いていたので「K君のことは僕達でサポートするし、何よりもK君がやってみると言ってくれたから」と頭を下げた。先生は「そっかK君が自分でね。そっかそっか」と、感慨深げにつぶやきながら、部屋長の欄にK君の名前を書いていた。母から聞いた話だが、その日母のところに担任の先生から電話があったらしい。僕とR君の行動をとっても褒めてくれたという。僕は何か特別な事をしたわけではない。ただK君にはできない事と勝手に決めつけなかっただけだ。そして、K君が少し勇気を出してくれただけだ。結果としてK君は心配することなく立派に部

だ。それは他の友達にも言えることで、走るのが得意な子がいれば、勉強が得意な子や絵を描くのが得意な子もいるように、人はそれぞれ違うのだから周りの人を認めようという雰囲気は僕達のクラスにはあったと思う。

そうして六年生になり、修学旅行が近づいてきた。僕は二泊できることが楽しみで仕方なかった。そして部屋決めの日を迎えた。一日目は大部屋だったのですんなりと決まったが、二日目の夜はそうはいかなかった。二人部屋か三人部屋だからだ。僕は仲の良いR君と、事前と同じ部屋になろうと話しかけていた。予定通り僕達はペアとなり周りを見渡すと、K君はまだ決まっていなかった。僕がR君の方を見るとR君も同じことを思ったのだろう、二人で、K君のところに向かった。「K君、僕達と同じ部屋にならない?」と言うとK君は笑顔で頷いた。次は部屋長決めだ。部屋長は夜、部屋長会議に出て、その晩にすることや次の日の予定を部屋のメンバーに伝える大事な役割だ。僕はふと、そつえばK君はクラス委員や実行委員をやったことあったか

屋長を務めてくれた。部屋長会議にもちゃんと出席し僕達に指示を出してくれた。僕達は楽しい二日目の夜を一緒に過ごすことができたのだ。担任の先生が卒業式の時「K君が居たから皆が優しい気持ちになれるし、それは他の誰かでもないK君だからなんだよ」と言っていた。もしかしたら僕達も最初からK君に優しく接することができていたかわからない。でも一緒に過ごすうちにK君を通して人思いやる心を学んだのではないだろうか。何かをするときは勇気があることもあると思う。でもK君の時もそうだが、やらなくて後悔するよりも僕はお節介でもいいから人に優しく、そして積極的に人と関わっていきなさいと思う。

別々の中学に進学したので、もうしばらくK君とは会っていない。でも久しぶりにK君に会いたいと思った。K君は今も僕の大切な友達だから。